

大賞

「福祉体験学習を通して考えた命の大切さ」

平塚市立旭陵中学校 一年 星野 章太

高齢化社会という言葉は、今、耳にしない日はないと思います。テレビや新聞では、こんな大変なことが起きているのかと思いつつも、自分にはあまり関係がないことだと思っていました。

この間、学校で福祉体験学習をさせていただき、僕は高齢者体験をしました。体の関節に重しを、目には視界をさえぎるゴーグル、耳には音が聞き取りにくくなる耳栓をしました。全てを装着した状態で、自分の日常と同じ動作をしてみると、体の不自由さに驚きながらも、今の自分には少し力もあるのです、何とか体験を終えることができましたが、本来の高齢者の方々は、その力も少し衰えてきているだろうし、毎日が、この状態なのかと思うと、装着品をはずした後の体は軽くなりましたが心が重くなりました。

僕には祖父がいます。とても元気な祖父で大好きな尊敬す

る人です。祖父は周りの人にも若く見られる人で、その言葉をとても喜んでいきます。僕は、今まで祖父に守ってもらっている大きな力を感じていました。そばにいと安心できる温かさを常にかけて育ちました。しかし、今回の疑似体験の設定が八十歳くらいと聞いてまた驚きました。僕の祖父と同じ年だったからです。

今の自分は何をするにも自分の体力基準で考えがちですが、この体験で、身近な元気そうな祖父は、やはり確実に自分とは違う日常での不自由さを抱えているのではないかと考えるようになりました。年を重ねていくことは仕方ないことですが、今の高齢者の方々も若くて、すてきな時代がありました。僕は、これからがんばらなければいけない者です。体験で学習した高齢者の方々の日常の不自由さを、身近な人から手助けしていけると自分の心も成長できるのではないかと思います。「歩くのが遅いな」「こんな荷物、なんてことないのに」ではなく、相手の立場になり、考えて行動できる人になろうと思いました。

教育委員会賞

本来の寿命

県立相原高等学校 三年 田仲 翠

私は、牛が大好きでいつか自分の牧場を持ちたいと考えています。牛について多くのことを知り、経験したいと思いい、大磯なごみ牧場という和牛の繁殖農家さんのもとへ実習へ行かせていただくことになりました。そこでは経営の難しさに加え、牛の寿命について考えることができました。

本来の牛の寿命は十五〜二十年ですが、大抵は十歳になる前に淘汰となってしまう。そんな中、大磯なごみ牧場では十歳以上の繁殖牛を多く飼育しています。牧場主である渡辺さんは私に教えてくれました。「私は牛が大好きだからこの仕事をやっているんだよ。今いる子牛たちは母牛が頑張っているから餌を食べることができて元気でいられる。私だけじゃこの牧場を経営していけない。だから母牛とこの牧場を経営していけるように、一緒に頑張っているんだ。」牛を飼育して命をつないでいるのは人間ですが、牛がいるからこそ

人間は生活していける。そのことは決して忘れてはいけないと再確認させられました。「妊娠することができなくなるまで飼育できるように、毎日の飼育管理を徹底して行っているの。」牛の状態を確認するために一頭一頭の牛舎に入り、様子を見ることでさえ牛とのコミュニケーションとなっているようでした。ですから、牛の目はとても優しかったです。人間の四分の一ほどの寿命しかない牛たちですが、その寿命を生きられるようにサポートしてあげなければいけない。人間も牛も同じ命なのだから淘汰しないで一緒に経営していく道を探す。私はそのことを学ぶことができました。獣医さんが「この牛はもうダメだ。」と言っても、可能性を信じて牛が生きられる道を探るのが牧場を経営している人の仕事だと分かりました。

私は、いつか牛たちが幸せに、人間と協力して生きられる牧場を作りたいです。淘汰ではなく、寿命まで生きていける牧場を。そして、多くの人に知ってもらいたいです。牛の本来の寿命は十五〜二十年だということを。

神奈川新聞社賞

温もりと重さ

県立中央農業高等学校 二年 石川 莉風

私がいのちの授業で学んだこと。それは、いのちの重みだ。中央農業高校では、「農業と環境」の一環でブロイラーを一人一羽雛から肥育し、と畜・解体するという授業がある。父が精肉店に勤めているため、家畜の生き死にといった話は幼いころから聞いていた。自分の手で解体し、食べる覚悟も固めていたつもりだった。

そして、入学してから半年経った頃、フワフワで手に収まってしまうほど小さい、人間に食べられるために生まれてきた、その雛たちがやって来た。面と向かってそのいのちに向き合った時、心が少しぐらついた。そして、いよいよブロイラーの管理が始まった。くちばしを焼くデビークも自分たちで行った。中には激痛で気絶してしまう個体もいたが、つき合いや飼料をより分けさせないためにも大切な作業なのだと、実際に行って感じる事ができた。

そういつた知識や技術を一心に学んでいるうちに、あつという間に一ヶ月半が過ぎた。肥育期間を終えたブロイラーをと畜するため、自分の重みで立てなくなったその体を抱き、放血する場所へ連れて行った。その温かい体温と穏やかな呼吸を肌で感じた時、心が痛んだ。そこからの作業は早さが重要なので、気持ちが追いついた時には、生き物から肉に姿を変えたものが目の前に置かれていた。その肉を部位ごとに丁寧に解体し、大切に持ち帰った。そして、机いっぱい料理を作り、家族と一緒に食べた。「美味しい」と思ったのと同じ時に、生きていた時のブロイラーの姿が脳裏によぎった。

一つのいのちを絶つ。その行為は決して、良いことではないと私は思う。それでも私は、あの「いのちの授業」で学んだ、あの温かな温もりと、切ない痛みを忘れないために、これからも畜産という産業について学んでいきたい。そう、強く思った。

テレビ神奈川賞

お米の家系図

鎌倉市立大船小学校 五年 瓜生 栞菜

「お米にも家族関係があるんだ。」

それが、お米についていろいろな事を調べたり学んだりした中で、一番心に残ったことでした。お米にも人間と同じように家族関係があるなんて、私は一度も考えたことがなかったからです。お米の種類はたくさんありました。それらが家系図でつながっていました。例えば、コシヒカリは、農林一号と農林二十二号という品種から生まれました。ササニシキは、ハツニシキとササシグレという品種からできていました。それぞれ別の品種がかけ合わさるたびに、よりおいしく、そして、強く生き残れる「子ども」を作っているのだと私は知りました。

父や母から私が生まれるように、別々の家族が合わさって子どもができるように、お米にも種類ごとに家族関係があったのです。生きもの全てに同じことが言えますが、「いのち」

はずつつながっていくのだということに感動しました。

いのちで大切なことは、私は二つあると思います。これまでに述べてきた「つながっていくこと」と、「一つ一つの才能や個性を認められる」ということ。どんな人にもその人にかない性格や考え方、個性があるということです。それはお米に関しても言えるのではないのでしょうか。

ササニシキは味がさっぱりしていて、やわらかい食感があり、おすしのシャリによく合います。また、コシヒカリは味が甘く、粘り気がある食感で、お弁当に適しています。

お米には持ちようを生かした使われ方があるように、私たちの命にも、大切な価値があるのだと思います。

お米の家系図のように、これからも私たちは家族を大切に、次の世代へ命をつないで生きていこうと思います。

神奈川県PTA協議会会長賞

尊い「命」

平塚市立土沢中学校 二年 佐藤 七海

私は今日、「未成年者とアルコール成長期の脳への影響」について学習し、色々なことを学びました。その内容の中で、聞いたことのない言葉は、沈黙の臓器、アセトアルデヒド、前頭前野、扁桃体、海馬、急性アルコール中毒、胎児性アルコール症候群、などです。他にも、初めて知ったことや驚いたことがたくさんありました。

私は、今回の学習で語っていた点で、命について同じように思う部分がたくさんありました。私は実際、小学六年生のときに一人の友達を失いました。年齢からして、命については十分分かっていっているつもりでした。ですが、本当にこのような事が起きると、考えているのでは、全く違いました。まづ、亡くなった事に対して、現実を受け止められませんでした。一年半も経っているのに、今でも、昨日、一緒に話をし

たかのように。今でも、友達の笑顔が絶えない、あの姿が思い浮かびます。本当に今でも、現実を受け止められませんし、受けとめたくないです。私は、少しでも友達が喜んでくれるような、願っているような事を、できるかぎりやっているし、これからもずっと続けていきたいです。

私には実際、このようなあつてはいけない悲しい出来事がありました。なので、小学六年生の頃に考えていた「命」と、今考えている「命」とは全く別ものです。ですから私は、この作文を通して本当の「命」というものを知ってもらいたいのです。

まず私が伝えたい事を述べます。最近の小、中、高校生は、すぐに「死ね」「消えろ」などの言葉を言います。言っている方は、ふざけているのかもしれませんが、相手はどうなのでしょう。ふざけと受け止めてくれる人もいますが、その軽々しく発した言葉で自ら命を絶ってしまう人もいます。なので私が一番伝えたいこと。それは、この軽々しく発した一言で、尊い「命」を失われるということです。

審査員特別賞

止められない人

伊勢原市立中沢中学校 三年 溝田 紗也

講師の佐々木さんの話したところの中にあつた犯罪の加害者は、どこにでもいる普通の人だということを聞いている時、私の頭の中に一つの事件が混ざりました。

7月の下旬頃、一つの障害者施設で大きな殺人事件がありました。入居者の障害者とその施設の元職員が殺害するといふ凶悪な事件です。その犯人は、障害者を疎んじ、この世界で障害者が必要ないという思考をもっていました。実際、供述でも、障害者を否定する事ばかり話しているそうです。

「この犯人は、他の事件の犯人とは違う」私は、そう思います。犯人は、目に見えない一線をいつの間にか越えている、そう佐々木さんは言いました。他の犯人は、そうなのかもしれません。でも、この事件の犯人だけは、一線とか想像力とか相手の立場とか、そういうものを一切無視して自分の考えを信じきって、恐らく自らの意思で一線を越えていったんだ

と思いました。

私は、この犯人が許せないし、正直言って嫌いです。家族に障害者がいるからです。家族や友達に障害者がいる人は、多分その犯人が許せないと思います。障害者も、私達と同じように生きています。その人達を、頭ごなしに否定しないでほしいと思います。

もう一人の講師の岸野さんの話の中に、人間には相手を殺さないようにするスイッチがそなわっていないというのがありました。この犯人も、やめるといふ気はなかったにしろ、多くの人数を殺すまで止めることができなくなっていたのだと思います。

犯罪を行う人の中で、止められそうな人は佐々木さんの三つの要素を使って、ギリギリで止める事ができたなら、この授業で観たDVDのような事が、もっと減るのではないかと思いました。

優秀賞

「命と夢」

鎌倉市立深沢小学校 六年 岩下 遥子

私は、命は夢だと思う。そして、夢は生きる希望、つまり平和につながると思う。だから平和が続くことは、夢をもち続けていることと同じだと思う。

一学期、学校で平和講話を聞いた。実際に紛争地や貧しい国に行った方が、そこで見たものや経験したことを話してくださった。そこで夢がもてない少女の話聞いた。その時、私は「私も日本のような紛争のない国に生まれてこなかったら、小学校の先生になりたいという夢をもてなかった。いや、夢など、もつよゆうもなかったら」と思った。

戦争、テロ、民族紛争など、互いに攻撃し合ったり、一方的に攻撃されたりすることは全部、人の命、つまり人の夢を奪う行為だ。そんな、いつ戦争、テロ、民族紛争が起きてもおかしくない地域に住む人たちは夢をもつことなんて、簡単なことではないはずだ。しかし、世界中の人が夢をもちたい

と同じように思うことができたなら、違う考えをもつ集団との争いが少しでも和らぐのではないだろうか。

先ほどの少女も、あるきっかけがあり、夢をもつことができた。その時夢をもつことができた少女の映像がでてきた。

少女の顔は笑っていて、とても幸せそうだった。だから、やはり平和な世界をつくるには、夢をもつことが大切だと思う。

私は日本のような平和なところに生まれてきた。世界は平和な国がまず夢をもち、いつ命がうばわれてもおかしくない国に、夢をもつきっかけをつくるのが近道だろう。だから私は、全宇宙にたった一つしかない自分の命、つまり自分の夢を、これからも大切にしていきたい。何年かかるか分からないが、私の夢が、世界平和のための一部となり、約七十億人の人々が夢をもつ世界が来ることを願っている。

優秀賞

一つの勇気で救えるいのち

大和市立草柳小学校 六年 青柳 理子

心臓マッサージはプロの人がやる事。素人の：しかも小学生の私がむやみにやって良い事ではないと、前までの私は思っていました。急に、自分の目の前で人が倒れたら：そう想像するだけでゾワゾワツと鳥はだが立って来ます。前の私だったら、おどろきで声さえかけられなかったかもしれない。でも、今はちがいます。応急手当で講習会というすばらしい授業を受けて、少し、自分が変わったような気がします。私は、今日の授業内容を少しでも覚えたくて、家に帰ったらすぐ、リングノートにメモをして、忘れないようにしました。なぜかそれだけで、人のいのちを救う第一歩をふんだように感じました。

そんな胸の奥にしつかり、大切に刻みこまれた応急手当で講習会の中で、特に感動したのが人形を人に見立てて行った、実際の心臓マッサージです。あばら骨を折ってしまいそうな

勢いで強く心臓をおす救急隊の方の姿は、とてもかっこよくて、輝いているように見えました。あばら骨なんかより、周囲の人たちの目より、この人のいのちを救いたい！そんな想いがにじみ出ていて、すごくあこがれました。感動しました。子どもだろうが、素人だろうが、誰にでも少しの勇気さえあれば、人のいのちを救うことができる。今日の授業で、あらためてそう思いました。この大和市が、この日本の人々が誰でも人を救う勇気があれば、優しさであふれた社会になると思います。この事を忘れずに、毎日をすごしていきたいと思えます。

その事が、倒れてしまった人を救う、第一歩だと思います。

優秀賞

『大切な命』

横浜市立中川小学校 三年 五十嵐 莉子

私は、今まで一度も命について考えたことがありませんでした。家族や友だちが元気に生きていることが当たり前だと思っていたからです。しかし、命のじゅぎょうを受けて、少しでも命について考えることができました。

私が五才の時に妹が生まれました。生まれたばかりの妹はとてもとても小さくて、泣いてばかりでした。自分一人では何もできません。でも、それを家族みんなが生けん命に守って、やっと大きくなったのです。私はこの時、赤ちゃんはこんなにみんなを守らないと生きていけないのだということを知りました。三年生になった私でも、まだまだ自分のことをすべてはできません。みんなに助けってもらって生きています。それに、ここまで大きくなるにも大変だったとお父さんとお母さんは言います。妹が生まれた時と同じように何もできない赤ちゃんだった時から、みんながやさしい気持

ちを持って一生けん命大切に育ててくれたからこそ、ここまです大きくなれたのだと思います。自分一人で大きくなったわけではないのだと感じました。だから、命は自分一人のものではないのです。

また、命のじゅぎょうで先生が言った「一日一日が本番」という言葉がとても心に残っています。私は今日「今日が本番」という気持ちです。先生が言ったように練習の日ならできていきました。先生が言ったように練習の日ならありません。それに命がいつまで続くかは、だれにもわからないのです。百才まで生きるかもしれないし、明日死んでしまうかもしれません。だから、みんなが守ってくれた命を一日一日大切に、後かいないように生きたいと思います。そして、一番大切なことは、命は一つしかないということです。だから、自分の命だけではなく、人の命も大切にしようと思います。

優秀賞

「命の授業」で学んだこと

伊勢原市立山王中学校 三年 村岡 里奈

私は、いのちの授業を聞いて、自分と重なることが多かったです。

私が小学三年生のころにお母さんがたおれました。それから病院や救急車などを見たりするとお母さんのたおれたときの顔を思い出します。それから、お母さんのいしきはありません。のどをきって呼吸器を入れていきます。いのちの授業をきいていて、その時の私をおもいだしました。今では病院も救急車も平気になりました。なぜなら、私には希望があるからです。私のお母さんは、これからも生き続けるからです。私が大人になるのを心まちにしてくれているお母さんは、私が大人になってから目をさますと思うからです。今では私も中学三年生です。あと五年したら二十歳になります。あと五年したら、お母さんは目を覚ましてくれます。

病気というのは、遺伝するかもしれませんが、なので、いつ

か私も病気になってたおれてしまうかもしれません。でも、私のまわりの人たちは、いつも笑顔で話しかけてほしいです。私のお母さんが亡くなったとしても、私は笑顔で話しかけます。ありがたいの気持ちをこめて、お母さんが大好きなのは、私の涙顔じゃなくて笑顔だから、私はお母さんの大好きな笑顔で、最後のお別れをしたいと思います。

私は命を大切にします。自分のことをまだよくわかりません。だから、もっと自分に向き合いたいです。

優秀賞

「命の大切さ」について

伊勢原市立中沢中学校 三年 松澤 光希

今回の講演会は、「命」について考えるきっかけになった。私は中学二年生のころ、いじめについて作文を書いた。その時私は被害者ではない。直接いじめた訳ではないけれど、見て見ぬふりをしたという立派な加害者だった。私は、被害にあった子の味方をし、助けることで周りに嫌われてしまうという気持ちが強くなってしまい、気づかないふりをしてしまった。殴るとか机や物に落書きされるといようなひどいものではなかった。ささいな事だったけど積み重なり、いじめがひどくなればその子は死んでいたかもしれない。

講演会で「ニュートンの勇氣」というDVDを見た。「警察を呼ぶ勇氣」「スマホのボタンを押す勇氣」というものを感じ、私が前に書いた作文を思い出した。被害にあった子は、私が周りに嫌われるこわさよりもっと辛い思いをしている。だから、気づかないふりをするのではなく、自分から手を差

しのべ、助けたいという事を書いた。

私は今、その事が実行できているだろうか。誰でも公平に接しているだろうか。できていない。口先だけになっていた。あの時は、最悪な結果にならなかったけれど、もし死んでしまったらどうだろうか。一生後悔すると思う。私はそんな後悔はしたくない。

たった一言で相手を傷つけることも救うこともできる。後者でなければならぬ。だからこそ「死」という言葉を軽く使ってはいけないのだと感じた。

一人に一つ、失ったら二度と取り戻すことのできない「命」。その命を絶対に他人の手で壊してはいけない、と改めて思った。

優秀賞

救えるいのち

県立中央農業高等学校 二年 佐々木 真彩

「分娩はじまるよ。」

ある日の土曜日、いつものように養豚部での活動を行うために学校に来た私は、この言葉を聞き、急いで豚舎に向かいました。

私が養豚部に入り、はじめての出産。どきどき、わくわくの中で向かった豚舎には、苦しそうに息をするお母さん豚がいました。そんなお母さん豚を見た時、さっきまでのどきどきが不安へと変わりました。もしも、子豚とお母さん豚に、なにかあったらどうしよう。そんな不安を抱えながら、お母さん豚をじっと見守っていた時、その瞬間は訪れました。一匹の子豚が顔を出したのです。私は、焦りながら子豚の顔をふき、体をふき、息ができるように介助しました。しっかりと息をさせた子豚にほっとし、その愛らしい姿と生きようと必死でお母さん豚の乳を吸う子豚を見て、生まれたばかり

のいのちに「すごい。」という感動が込み上げてきました。そして、次々と生まれてくる子豚の分娩介助は、四時間が経過していました。時間が過ぎるのを忘れ、分娩介助にあたっていた私は、十三頭もの子豚が生まれてのに気づきました。たくさんの子豚達を見て、その可愛らしさに心は惹かれ続けました。私は次に生まれてくる子豚が待ち遠しく、じっと見つめていた時、「ニョロ」と十四頭目の子豚が出てきました。やっと来た、とその子を持ち上げた時、その子豚の力のなさに異変が起きることに気付きました。息をしてなかったのです。私は必死に生き返そうと手を尽くしました。しかし、その子豚が息をすることはありませんでした。

私は、この分娩で救えた命があったのではないかと後悔することがあります。一つの命を救えなかった重み。豚舎に行くたびに、その重みがのしかかってきます。命を救うことの難しさ。この経験から救える命を増やしていけるように。